

## ア系文脈指示詞と聞き手の存在認知に関する研究

陳, 海濤

九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コミュニケーションデザイン科学コース : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1650611>

---

出版情報 : 芸術工学研究. 24, pp.1-12, 2016-03-16. 九州大学大学院芸術工学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

## ア系文脈指示詞と聞き手の存在認知に関する研究

A Study on the Relation between the Usage of *a*-series Discourse Demonstratives and the Speaker's Recognition of the Listener陳海濤<sup>1</sup>

CHEN Haitao

## Abstract

Previous studies have paid much attention on the subject whether the knowledge of the listener is necessary or not when using *a*-series discourse demonstratives, but the answer is still unclear. In this paper, cognitive research methods were employed to argue the relationship between the usage of *a*-series discourse demonstratives and the speaker's recognition of the listener. In addition, the definition of the shared knowledge was clarified and pointed out some problems in current researches. As revealed in this study, it is difficult to explain the usage of *a*-series discourse demonstratives without assuming the knowledge of the listener. The basic method for the usage of *a*-series discourse demonstratives is based on the direct knowledge of the speaker and the shared knowledge of the speaker and the listener. In conclusion, it is necessary to include the knowledge of the listener when using *a*-series discourse demonstratives.

## 0. はじめに

近年の先行研究では、ア系文脈指示詞<sup>1)</sup>の使用には、「聞き手」の知識を含むかどうかについて、見解がまだ一致していない。主な先行研究の中で、久野(1973)、東郷(2000)、迫田(2004)は、ア系文脈指示詞の使用を聞き手の知識と関連させて説明する一方、堀口(1978)、黒田(1979)、田窪・金水(1996b)は「聞き手の知識」を排除した。最近の先行研究では、ア系文脈指示詞の使用には、聞き手の知識が不要という見解が多くなり、定説化される勢いがある。

指示詞の使い分けに関する決め手はあくまでも、話し手である。話し手が、必要な情報を心的に処理し、言語化して表出する。言葉は人間の心的なメカニズムと密接に関わっている。

本稿では、東郷(2000)の結論の一部を踏襲しながら、先行研究における不備なところを指摘した上で、共有知識を定義する。ア系文脈指示詞の使用には、聞き手の知識を想定しないと、解釈できない例文が存在する。また、ア系文脈指示詞の使用と聞き手の存在認知に焦点を当て、認知的研究方法を使って分析を行う。話し手の認知動機と聞き手の存在認知を明らかにし、さらにア系文脈指示詞の使用を精査する。

結論を先取りして言えば、ア系文脈指示詞の使用には、話し手<sup>2)</sup>は聞き手の知識を想定する必要があると考えられる。

## 1. 先行研究

近年の先行研究においては、ア系文脈指示詞の使用に

連絡先：陳海濤, chenhaitaodairendaigaku@gmail.com

<sup>1</sup>九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コミュニケーションデザイン科学コース  
Communication Design Science Course, Department of Design, Graduate School of Design, Kyushu University

ついて、「聞き手」の知識を含むかどうかには見解がまだ一致していない。本節では、今までの主な先行研究を概観する。久野(1973), 東郷(2000), 迫田(2004)は、ア系文脈指示詞の使用が聞き手の知識と関連して説明する。一方、堀口(1978), 黒田(1979), 田窪・金水(1996b), は「聞き手の知識」を排除した。この2つの相反する見解に応じて、先行研究を二つに分けて紹介する。

## 1.1 聞き手の知識を想定する先行研究

### 1.1.1 久野(1973)

以下、ア系とソ系の指示詞の使用について、久野の見解を紹介する。

ア系列：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。

ソ系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知らないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。

久野(1973 : 69)

久野は、話し手・聞き手が「よく知っているかどうか」ということを判断基準として、指示詞の使い分けを分析する。確かに、指示詞の研究に対して、大きな貢献とは言える。しかしながら、久野の解釈では、うまく説明できない例が、後に黒田(1979)によって反例(本稿では、例11)として提出されている。

### 1.1.2 東郷(2000)

東郷(2000)は田窪・金水(1996b)の聞き手の知識を想定しないモデルという説に批判を加えた後、やはり聞き手の知識をモデルの中に組み入れた共有知識という概念が必要であると主張している。

東郷はア系文脈指示の使用の必要条件を以下のように述べている。

- (a) 指示対象についての概念的・間接的知識ではなく、体験などに基づく直接的知識が必要な内容を述べている
- (b) 聞き手の談話モデルの状態の査定をいったん停止、または意図的にカッコに入れている。

東郷(2000:38)

(16) 今日神田で火事があったよ。{?あの/\*その}火事のことだから人が何人も死んだと思うよ。

(21) A: Bさんが芸能界に入ったのはどんな時代でしたか?

B:あの頃は浅草オペラの全盛の時代でしたね。

東郷(2000:38)

また、東郷(2000:38)が上の(16)(東郷が黒田から引用した例文)と(21)(例文(16)と(21)が東郷の論文の中で順番)の例文を示しながら、ア系文脈指示詞の規定について、重要な観点を提示している。

話し手は(b)の操作を行なうことで、

(16)のような一方的断定というニュアンスや、

(21)の聞き手を置いてきぼりにして回想にふけているというニュアンスが生じる。

東郷(2000:38)

### 1.1.3 迫田(2004)

「ア」は話し手・聞き手のどちらも知っている対象に使うという制約があると指摘しているが、以下の説明(本論に関連するものだけを取り上げている)に見られるように例外的に聞き手が知らない対象についても用いられることを指摘している。

聞き手の知らない指示対象でも、独り言や回想的な表現では「ア」が用いられる。

## 1.2 聞き手の知識を想定しない先行研究

### 1.2.1 堀口(1978)

堀口(1978:84)は、「話し手の対象に対する関わりの方持ちの違いによって、コ・ソ・アが使い分けられる」ということを主張した。ア系文脈指示詞に関する用法の説明は下記のようなものである。

文脈指示の用法において、観念対象指示の用法の場合と同じく、ア系列の語は、話し手が自己に関わり強い遥かな存在だと捉えている事柄・事物の対象として、強烈に指示するのに用いられる。ただし、そ

の対象が、聞き手にも同様に、自己に関わり強い遙かな存在だと捉えられる場合には、両者に一体感といった満足感が得られるが、そうでない場合には、話し手の一方的ななつかしみを表すことになるから、注意を要する。

堀口 (1978 : 85)

堀口(1978 : 85)は、ア系文脈指示詞は話し手の自己に関わり強い遙かなものだと指摘している。従って、聞き手の知識は必ずしも必要なものではないとした。

### 1.2.2 黒田 (1979)

黒田は久野(1973)の提示した「知っている/知らない」という説に対する反例を示し、「概念的知識/直接的知識」という概念を用いてその反例を解釈することを試みた。

黒田は指示詞の選択について以下のような基準があると考えている。

ア系(及びコ系):直接的知識の対象として指向する。

ソ系:対象を概念的知識の対象として指向する。

黒田 (1979 : 102)

黒田は指示詞の使い分けの基準は話し手にとって概念的知識であるか、または直接的知識であるかによって決まると考え、聞き手の知識は無関係であるとした。

### 1.2.3 田窪・金水 (1996b)

指示詞における先行研究の中で、もっとも重要なのは、金水・田窪に提示された談話管理理論というものである。これは、黒田が提示した「概念的知識」、「直接的知識」という概念に基づいて、発展させた「複数の心の領域」を設定したものである。また、聞き手の知識という概念を排除し、「聞き手の知識を想定しないモデル」を主張している。具体的な内容は本論で紹介する。

### 1.3 問題点

以上、概観した先行研究では、ア系文脈指示詞の使用に関して、各研究者が主張するア系とソ系の使用範囲が異なる。先行研究における問題点をそれぞれ以下で論じる。

## 2. 共有知識の不要という考え方

堀口 (1978)、黒田 (1979)、田窪・金水 (1996b)、は「聞き手の知識」を排除した。本節では、ア系文脈指示詞の使用には、「共有知識を想定すると、無限に続く」(田窪・金水 : 1996b) という考え方に対して、不備なところを指摘し、対抗案を示していく。

### 2.1 共有知識のパラドクスに関する提案

1. 話し手が P を知っている。

1' .聞き手が P を知っている。

2. 話し手が 1' を知っている。

2' .聞き手が 1 を知っている。

3. 話し手が 2' を知っている。

3' .聞き手が 2 を知っている。

田窪・金水(1996b : 253)

これは、いわゆる、共有知識のパラドクスである。

田窪・金水 (1996b : 252) によると、「よく知られているように知識の共有性はこれを話し手と聞き手の知識の相互的共有と考えた場合、かならず無限遡及に陥る」と指摘している。そして、「言語形式の使用法の記述は、その中に聞き手の知識の想定を含んではいけない」(1996b : 256)という原則を示し、聞き手の知識を排除した。具体的な内容について、後文で紹介する。

### 2.2 共有知識と実際の応用

人間がお互いに考えていることを感知することは不可能である。相手が指示対象に対して、確実に知識を持っているかどうかは確認しにくい。話し手と聞き手が一緒に経験したことであっても、聞き手が忘れてしまったら、共有知識にならない。また、お互いがお互いに知っていると思っても、その対象物や出来事が別のものを指すことがあるのはだれしもが経験することである。

田窪・金水(1996b)が提示した「共有知識」は話し手の知識と聞き手の知識の間のリンクにより、確かめられると考えられる。そういう「共有知識」を追求すると、無限遡及になるし、現実にはいくら追求しても、お互いの共有知識を確認することは不可能である。それは、話し手の知識は直接、聞き手の知識とつながっていないからである。しかしながら、ア系指示詞を使用する際には、実際には、談話上想定した共有知識のリンクを前提にし

ているのである。以上の説明を下图1で示す。

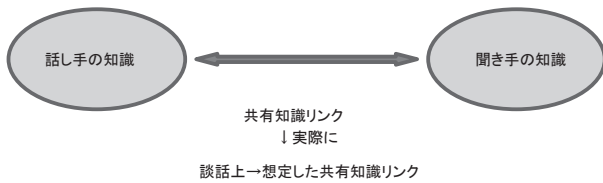


図1 共有知識リンク

発話する時は、瞬間的に反応し、心的モニターにおけるものは言語化して表出する。人間の認知、知識範囲や年齢などにより、発話が必ず理論上で正しい、検証されたものとは限らない。つまり、実際の発話には、「談話上の共有知識」が用いられる。言い換えれば、話し手の知識と聞き手の知識の間のリンクは共有知識のリンクがあるという前提があって成り立っているものなのである。話し手、あるいは聞き手がそのような知識をリンクさせようという円滑な談話成立を可能にする積極的意志がある。そのような知識があることを前提にして談話をすすめているのである。そういう談話上の共有知識のリンクを追求すると、無限遡求に陥らないと考えることができる。

同じ指摘は東郷では、「神の視点」<sup>3)</sup>により、「パラドクス」を回避できると指摘している。つまり、「パラドクス」の成立条件は「神の視点」であり、「その一部は現実の談話には不要である。われわれは現実には話し手の側からの一方的な想定に基づいて談話を構築する」(東郷2000:38)と指摘している。

この「談話上の共有知識」とは、話し手の認識上の問題であって聞き手が指示対象を知らなかったり、失念したりすることがあるが、話し手自身が、聞き手が知っているという前提でもって話を進めることである。発話の進め方とは、人間の心はお互いに相手の心を読めないから、話し手は自分の判断により、指示詞の使い分けをしているのである。

または、田窪・金水(1996b:255)では、「三段階の埋め込みでさえ計算には負担がかかわることである」と指摘している。実際には、田窪・金水の言う共有知識を用いずに、談話上の共有知識を用いるから、そういう心理的な計算負担は起こらない。

東郷(2000:38)は、話し手の視点のみに立つことにより、「話し手がPを知っている」と「話し手は聞き手がP

を知っていることを想定している」という二つの条件だけで十分だと指摘している。つまり、現実では、共有知識の追求は無限遡求に陥らないのである。

本稿で用いる「談話上の共有知識」を以下のように定義する。

共有知識とは、話し手の知識に関するリンクと聞き手の知識に関するリンクが直接につながるものではなく、話し手が聞き手も同じ知識を持っていると想定する共有知識である。

話し手が聞き手に対してリンクさせようとする、話し手が一方的に持っていると考ええる共有知識である。共有知識といっても、一方的なので、時にはリンクしないこともあると考えられる。

### 3. 共有知識の使用に関する考察

金水・田窪は、話し手の心的領域を二つに分けて、それぞれに格納する領域を D-領域と I-領域と名付けている。いわゆる、「談話管理理論」である。

A系列は D-領域に属している。つまり、A系文脈指示詞は直接的知識を指している。

D-領域 (長期記憶とリンクされる): A系

: 長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード情報と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される。

: 直示的指示が可能

I-領域 (一時的作業領域とリンクされる): ソ系

: まだ検証されていない情報 (推論、伝聞などで間接的に得られた情報、仮定などで仮想的に設定される情報) とリンクされる。

: 記述などにより間接的指示される。

金水・田窪(1996b:263)

以上の解釈だけでは、A系文脈指示詞の使用について、説明できない例文がある。よって、本稿では、A系は話者の直接的知識に属することを認めた上で、さらに、共有知識有無の判断が必要だと考えている。

本稿では、A系文脈指示詞の使用場面を、三つに分けて分析する。すなわち、①全共有知識を持つ場合、②部分共有知識を持つ場合と、③共有知識を持っていない場

合である。

以下では、それぞれについて、考察を行う。

### 3.1 全共有知識を持つ場合に関する考察

#### 3.1.1 相手(聞き手)の知識の有無による共有知識

(1) A「三年前、いっしょにスキーに行ったのを覚えて  
いますか」

B「はい、よく覚えています。あの時は、ほん  
とに楽しかったですね」

金水・木村・田窪 (1989 : 34) (下線は筆者)

Aは質問をし、話し手Bが「いっしょにスキーに行  
ったの」を覚えているかどうかを確かめている。Aが質問  
を通して、自分が「いっしょにスキーに行った」という  
記憶があるということを話し手Bに表明した。

話し手Bは聞き手Aの質問に応じて、「覚えています」  
という返事をして、話し手Bもそういう記憶があるとい  
うことを表明している。

つまり、会話のやりとりを通して、話し手Bは自分と  
聞き手Aが両方共に、「いっしょにスキーに行った」と  
いう記憶を持っていることがわかる。

以上の例文では、話し手は、聞き手が知っていると思  
っていることではなく、聞き手の知識の有無によって決  
まることがわかる。話し手は一緒に経験したことを聞き  
手による質問という形で確かめられることによって、共  
有知識があることを確定している。

ところで、話し手と聞き手が話している「いっしょに  
スキーに行った」ということがお互いに同一の出来事か  
どうかは別の問題になる。

東郷(2000 : 39)によると、「相手の共有知識につい  
ての査定が間違っていれば、指示詞はうまく理解されな  
いことがあるが、このような齟齬が生じたときには、すみ  
やかに修復過程 repair が実行される」と指摘している。

つまり、会話している時、誤解した場合には、その直  
後の談話により、修正することができるということであ  
る。しかし、全て修正することができるとは限らない。  
極端なことを言えば、間違っただけの場合もある。しか  
し、そのような場合は、本稿の議論の対象外なので、こ  
こでは触れない。

#### 3.1.2 一般的常識による共有知識

まず、「一般的常識」を定義する。

話し手が、その話し手と同じ特定の文化圏内いる社  
会一般の人に共有されていると認識する知識を指す。  
一般常識と地方や話し手の知識範囲などによって得  
られた常識の範囲には相違がある。

つまり、一般的常識に対して、地域差や個人差もある。  
例えば、福岡の名物だったら、福岡やその周辺の県の人  
であれば一般的に知っている。しかし、例えば、北海道  
の生まれ、育ちの人であれば、地理的に非常に遠い福岡  
の名物を知らないことが一般的であろう。

例えば、以下の例文のように、文学者たちが集まって、  
夏目漱石という有名な文学者のことを話しているとする。

(2) 「最近、夏目漱石の『ころ』を読んだん  
ですけどね。あの本はほんとにすばらしい本  
ですね」  
(作例)

「最近、夏目漱石の『ころ』を読んだんですけどね」  
という発話から、話し手が指示対象を知っていることは  
判断できる。以上の発話だけからでは、聞き手が指示対  
象である「ころ」という夏目漱石の本を知っているか  
どうかは判断できない。

「あの」は『ころ』という本を指している。ア系文脈  
指示詞は、話し手は現実で起こったことをある形で、記  
憶に格納し、保存している。使用する時、記憶に保存し  
た要素を抽出し、言語化して表出する。

夏目漱石はとても有名な文学者であり、その小説『こ  
ころ』を知っているのが最低限の常識だと考えている。  
この例文では、話し手は指示対象を一般的常識として、  
両方とも持っているという前提で発話を行っている。暗  
黙のうちに、話し手は指示対象が文学者として知られる  
人物であることを一般的な常識とし、話し手は聞き手が  
指示対象を知っていることを一方的に前提にすることによ  
って、「あの」を使って談話上の共有知識としたと考えら  
れる。

#### 3.1.3 観念による聞き手の知識を想定する

堀口は、観念による聞き手の知識を想定する用法を「観

念指示用法」と名付け、次のように分析した。

(3) A「アレヲ持ッテ来テクレ」

B「ハイ、承知シマシタ」

とか

A「君、アノ件ハ片付イタカイ」

B「ハイ、片付ケマシタ」

とかいうように、積極的に用いられることがある。「アレ」「アノ件」は遙かな存在として話し手の観念にある事物であるが、同じ環境にある相手も、同じ事物を遙かな存在として同じように観念に浮べてくれる、という期待を前提とした表現だといえよう。近称・中称がこの種の表現として積極的に用いられないのは、他人の観念にある遙かでない存在を推察するということは、きわめて困難だからであろう。相手の推察の成功にたよるこの種の表現も、相手に推察不能の場合には

B「アレトハ何デスカ」

という返答があるであろう。しかし、推察が成功した場合には、たがいに一体感・仲間意識といった満足感が感じられるのである。

堀口 (1978b : 82-83)

確かに、そういう会話自体が存在している。しかしながら、堀口 (1978b:83) によれば、「アレ」「アノ件」は遙かな存在として話し手の観念にある事物であるが、同じ環境にある相手も、同じ事物を遙かな存在として同じように観念に浮べてくれる、という期待を前提とした表現だといえよう」と指摘している。

なぜ、ア系文脈指示詞を使用する時は、相手がそういう期待に応じないといけないかについて、堀口は説得力ある理由を示していない。

本稿では、ア系文脈指示詞の使用には、相手が「同じ事物を遙かな存在として同じように観念に浮べてくれる、という期待」(堀口 1978b : 83) に応じるということよりも、ア系文脈指示詞の語用論的な要因があると考えられる。

つまり、話し手はア系文脈指示詞を使用することで、聞き手に対して共有する知識を要求し、聞き手は話し手と共有すると考える指示対象を記憶の中を検索してその対象を見つけ出そうとするという、語用論的な要因があると考えている。

より具体的には、話し手は「アレヲ持ッテ来テクレ」

と言った時点で、話し手が自分の指示している指示対象物何であるかを知っており、その指示対象が何であるかを聞き手が知っているとし話し手は想定している。聞き手の方は、どのようにして自分の記憶の中から「アレ」にあたるものを探し出すのか。まず、話し手がどのようなものを必要としているかを見極めることから始めるかと思うが、また聞き手は話し手と何か共通、または関係の深い知識や事物が何かも考えるであろう。さらにどのような場面なのかを瞬時に把握する必要がある。そのような観点から「アレ」にあたるものを記憶の中から探し出すのである。従って、それが見つければ、「ハイ、承知シマシタ」という回答をするし、見つからなければ、「アレトハ何デスカ」と質問するであろう。

ア系文脈指示使用では、聞き手が指示対象を知っているという前提で、話し手が聞き手に一方的にア系指示詞を使用して要求するのである。よって、話し手はア系文脈指示詞を使用する時、聞き手は暗黙のうちに、自分の記憶の中で、共有する指示対象を見出そうとするのである。次の例も同様に説明ができるものである。

(4) (電話での会話)

A「ところで、あの本、もう読みましたか」

B「ああ、1週間まえにお借りした本ですね。

半分くらい読んだところですが、なかなか面白いですね」

金水・木村・田窪 (1989 : 39) (下線は筆者)

以上の例文は話し手側に共有知識があると想定しないと、うまく説明できないと考えられる。

話し手Aは何の文脈もなく、いきなり、「あの本、もう読みましたか」という質問をBに聞く。もし、「あの」がただ話し手の直接的経験を指すのであれば、聞き手Bは理解できないから、「あの本ってどの本？」と聞くしかないはずだと思う。聞き手は自分の領域の同じ指示対象を探索することをしないとと思う。もちろん、自分の直接的経験を相手に聞くことはあり得ないと思う。

話し手は「あの本」と言った時、話し手と聞き手両方とも知っているとして想定している。ア系文脈指示の使用は共有知識のマーカー(標識)として、聞き手の記憶にある共有要素を見出させようとする。なぜ、ここでア系文脈指示詞が聞き手の記憶の中の指示対象と考えられるものを検索させるようにすることになるのか。それは、ア

系文脈指示詞を使用することで聞き手に対して暗示的に、ある内的行為（つまり、記憶中の検索）を促しているのではないかということである。

聞き手は共有する指示対象物（＝話し手から借用した本）を発見したら、「ああ、1週間まえにお借りした本ですね。半分くらい読んだところですが」という返事をすることになる。しかし、見当たらない場合にもあるから、その時は「どの本でしたかねえ？」のように逆に質問してどの本のことであるかを明らかにすることも予測できる。すなわち、このア系文脈指示詞は共有知識を指しているのである。

### 3.2 部分共有知識を持つ場合

部分共有知識の用法は全共有知識の用法から、拡張したものだと考えられる。前節で述べたように、ア系文脈指示詞の基本的な用法は、共有知識を要求することである。つまり、その基本的な用法とは、聞き手と指示対象物を共有することを話し手が想定することである。そして、その拡張として話し手と聞き手の親密度、つまり、距離感を縮めるという用法が生み出されたり、逆に聞き手がその指示対象を知らなければ、話し手が聞き手を責める気持ちも表すことができると考えられる。

#### 3.2.1 話し手の方が情報量が多い場合

##### ① ア系文脈指示詞の逆用＝責める気持ちを表す

(5) A 「この本、ミラーという人が書いたそうなんです、どこの人ですか？」

B 「君、あの先生を知らないのか」  
吉本(1992 : 115) (下線は筆者)

上の会話では、話し手と聞き手が「ミラー」先生についての話題について、話しを行っている。A は敬語「です」を使っているから、お互いに、そんなに親しい関係ではなく、一定の距離感があることは判断できるが、それと同時に、その話題に関して話し合っているから、上下関係はあるものの、話し手と聞き手の間はある程度の仲間意識を持っていると推測できる。

この例文では、「あの」の代わりに単に「ミラー先生を知らないのか」とも言える。話し手 B が聞き手 A を責める気持ちが、「君、知らないのか」という発話とその文体、敬意のレベルから分かる。では、なぜここでは、指示詞

として「あの」しか使えないのか。

まず、話し手 B と聞き手 A の間にある程度の仲間意識がある。つまり、話し手 B が発話する時、話し手 B が相手(聞き手 A)の指示対象に対する知識や情報量などを発話の初期値として設定している。

話し手 B は聞き手 A がミラー先生のことを知らないことを知っているのにもかかわらず（だからこそ質問している）、「あの」を使っている。それはアの逆用という用法であり、話し手の、聞き手に対する感情を表すものである。この例文の場合では、ア系指示詞の使用により、話し手がその本の著者を指示対象として、聞き手が知っておくべきだと話し手が考えている、と設定されていることである。さらに、知っておくべきなのに、実際には知らないことを、「君」「知らないのか」のような上下関係の視点も添加され、反語的に、相手のことを責める気持ちを表している。

つまり、ア系を故意に使用してその意味を逆利用する方法である。ア系文脈指示詞に共有知識が不要だったら、そういう聞き手を責める言外の意味は表出しないと考えられる。

##### ② 相手の気持ちを配慮し、双方の距離を縮める

(6) A 「山田先生に教えを受けられたそうですが、  
どんな方でしたか」

B 「あの先生はとても厳しい方でした」  
金水・木村・田窪 (1989 : 39) (下線は筆者)

聞き手 A は他の人から「山田先生」のことを聞いたり、または一度会ったりしたこと、「山田先生」のことをある程度知っている。また、話し手 B の返事「あの先生はとても厳しい方でした」より話し手 B は聞き手 A より格段に詳しい情報を持っていることが分かる。

つまり、双方の情報量の差について言えば、話し手 B は聞き手 A よりも山田先生に関して格段に多い情報と持つと同時に共有している部分もあるということである。以上の説明を下図 2 で示す。A の知識量は小さな丸で表記する。B の知識量は大きな丸で表記する。B だけが持っている知識は斜線で表記する。



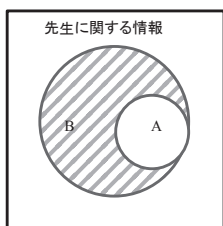


図2 先生に関する情報量の分布

指示対象に対する情報量は、話し手 B が相手 A より多くても、相手 A がある程度知識を持っていれば、それが共通知識として認められるので、「あの」が使える。ア系文脈指示詞を使って、自分の知識量に関するレベルを下げて、聞き手と同じレベルにし、両方の間の距離を縮めるという機能を持っている。

### 3.2.2 話し手のほうが情報量が少ない場合

(7) 君は大阪で山田太郎という先生に教わったそうだけど、その先生は講義が上手かい。

黒田(1979: 100) (下線は筆者)

黒田(1979: 100)によると、「話し手は「その先生」を山田太郎という先生、聞き手が大阪で教わった先生、という概念によって理解しているにすぎない」と指摘している。では、直接経験と間接経験の境目はなにか。話し手は「君は大阪で山田太郎という先生に教わった」という知識を話し手にとって、直接経験か、または、間接経験に属するか判断しにくいと思う。従って、この文だけからでは、判断できない。

この例文では、話し手のもつ「君は大阪で山田太郎という先生に教わった」という情報よりもさらに多くの情報を聞き手（対話の中では聞き手の発話が示されていない）も持っているとした話し手は想定している。しかし、話し手は「先生は講義が上手かい」という情報は持っていない。もしくは、持っているが、持っていないふりをして、聞き手に聞くことによってこの聞き手がどのように先生の講義を思っているのかという情報を得ようとしている。いずれにしても、「先生は講義が上手かい」という情報を自分が持っていないという場面を作りだしている。

話し手が「先生は講義が上手かい」という自分が知らない部分に焦点を当てそこを強調しているから、ソ系を使うことで、指示対象の「山田」先生に関する情報は聞

き手（「君」）が多く持っているということを強調する。ここでは、聞き手（「君」）の方が情報量が多いと話し手が想定している。すなわち、指示対象（先生が講義が上手かどうかについての情報）は心理的に聞き手の領域に属するから、ソ系を使用する。よって、この例文では、「その」を使う要因を考えると、黒田(1979: 100)の言う「概念によって理解しすぎない」ではなく、知識の多寡、すなわち、双方の情報量によって決まると考えられる。

全共有知識と部分共有知識の相違は実際の知識の相違だけではなく、話し手の共有知識の強調度の相違にもある。全共有知識は話し手と聞き手が指示対象に対して、共有するというのを強調する。また、部分共有知識の場合、ア系指示詞の使用には、二つの解釈が生じる。

一つは、話し手が「共有」しているという認識をもっている、実際には聞き手が持っていない場合、聞き手が知っていなければならぬ指示対象に関する情報を持っていないことから、話し手が聞き手を責めるや驚くという解釈が生じる。もう一つは、話し手の方が聞き手よりも情報量が多い場合、ア系を使用し、双方が持っている共通の知識（部分共有知識）に焦点を当てそこを強調し、聞き手のことを配慮し、距離感を縮めるということである。

また、聞き手の情報量が多い場合、ソ系を使って、話し手と聞き手の共有していない部分を指し、相手の情報が豊富であることを強調し、一種の謙遜した気持ちを表す。

### 3.3 共有知識を持っていない場合

すでに先行研究で触れたように、東郷(2000: 38)は、「聞き手の談話モデルの状態の査定をいったん停止、または意図的にカッコに入れている」という操作を行うには、「一方的断定というニュアンス」や「回想にふけているニュアンスが生じる」と指摘する。しかしながら、どんな場合に、「聞き手の談話モデルの状態の査定をいったん停止」するということになるのかは示していない。

本稿では、東郷が言及した「聞き手の談話モデルの状態の査定をいったん停止、または意図的にカッコに入れている」、つまり、共有知識を持っていない場合におけるア系文脈指示詞の使用要因について考察する。

ア系文脈指示詞の使用は、共有知識を要求するのが基本であり、ア系の使用により、聞き手は共有知識を探索し始める。ア系文脈指示詞の使用には共有知識を指して

いない場合には、ほぼ自動的に聞き手に共有知識を探索させ、負担や圧力をかけてしまい、時には聞き手の面子をつぶす場合もある。その代償として、話し手が聞き手にかけた負担を聞き手の側で解消することがある。つまり、聞き手が知識を探索することを中止するのである。

聞き手の側も発話の状況や相手との関係によって、ア系文脈指示詞を使用するにしても、共有知識を要求されているのか、あるいは共有知識を要求されていないのかのどちらかを推測し、それに応じて聞き手の記憶に格納した共有知識に焦点を当てて操作するかどうかを判断する。具体的には、「回想」、「一方的断定というニュアンス」（本節では、他の語用論的要因でアにおける共有知識を要求しない場合）の場合である。

また、共有知識を持たない時には、聞き手の知識を考慮しないことが、聞き手の存在や聞き手の言動を考慮していないわけではないことを加えておく。

以上の説明を踏まえ、「回想」、「一方的断定というニュアンス」におけるア系文脈指示の使用について考察する。

### 3.3.1 独言・内言における回想

独言や内言では聞き手は一般には存在しないか、または聞き手がいてもよいが、その場合には聞き手は話し手にとっては聞き手としての役割がない。このような状況におけるア系列文脈指示の用法を考察する。

- (8) あの時、1時間早く帰っていれば、叱られないで済んだのになあ。

金水・木村・田窪（1989：37）（下線は筆者）

上の例文は、談話には独言の場合でも回想の場合でも出現するが、どちらにしても、話し手自身の体験を自分自身に対して話しているので、明らかに聞き手の記憶、経験や知識には全く触れていない。

「あの」はすでに発生した、記憶に格納した過去のことを指し、話し手自身の直接の体験を思い出して話している。よって、ここでは「あの」しか使えない。

- (9) 飛行機が完全にストップして、人々がシートベルトを外し、物入れの中からバッグやら上着やらをとりだし始めるまで、僕はずっとあの高原の中にいた。僕は草の匂いをかぎ、肌に風を感じ、鳥の声を聞いた。

『ノルウェーの森』村上春樹（下線は筆者）

これは小説の冒頭の部分で、「あの高原」について背景を説明した文脈はない。

話し手「僕」が心の中で用いる内言を文字化し表出させたものである。小説での内言の場合、聞き手は読者としてしか存在しておらず、聞き手のことを考慮する必要はない。ア系文脈指示詞の使い分けにおける客観的な主要な要素から聞き手という要素は除かれ、話し手と指示対象だけが残っている。

「あの高原」というのは、実際に、目の前に存在している高原ではなく、頭の中で描いている過去の印象深い記憶に存在しているイメージである。小説内での話し手「僕」が想像の翼を伸ばし、記憶に格納した過去の記憶を呼び起こし、眼前でいきいきと起こっているかのように、映像化させる。「草の匂いをかぎ、肌に風を感じ、鳥の声を聞いた」という表現から見れば、話し手は過去の出来事を、臨場感をもってはっきり描いた、脳に格納した記憶である。話し手が過ぎ去ったことを振り返り、回顧し、懐かしさを表している。

独言や内言におけるア系文脈指示詞は過去に発生したことが、脳に記憶という形で保存され、その記憶を呼び起こしたい時に、その記憶を再生し、言語化し、表出する。

過去で発生した脳に格納した直接的知識を表せる指示詞はア系しかない。同じ説は田窪・金水（1996b）と東郷(2000)にも見られる。

### 3.3.2 回想

- (10) A 「Bさんが芸能界に入ったのはどんな時代でしたか？」

B 「あの頃は浅草オペラの全盛時代でしたね」

吉本(1992：101)

「あの頃」は「芸能界に入った」時代、即ち、「浅草オペラの全盛時代」を指している。AはBに対して「芸能界に入った」具体的な時代を聞いているから、明らかに指示対象に対して、具体的な知識を持っていないと判断できる。この談話では、「あの頃」についての具体的な情報は話し手Bだけがもっている。言い換えれば、Bに属する特別な個人的な記憶を指している。

指示対象は話し手 B にとって、過去で発生した個人の直接経験では、「あの」しか使えない。ア系指示詞の使用原則として、指示対象に対して、直接的知識が必要である。また、東郷(2000:38)が指摘しているように、「聞き手を置いてきぼりにして回想にふけている」時、アが使える。

本節では、回想にふける時のアの使用の理由について考察する。つまり、話し手が指示対象を知っていて、聞き手が指示対象に対して、知識を持っていないのに、「あの」を使うのはなぜかについて考察する。

回想と言うのは、話し手に属する脳に格納した過去の直接的知識を指して、聞き手の知識とは全く関係ない。回想した時、話し手が周りの状況観察を一時的に放棄した状態で、自分だけに属している経験や個人事件などを述べている。つまり、聞き手の知識や存在を一時的に遮って、話し手と指示対象だけが残り、一種の独言・内言ともいえる。

回想におけるア系文脈指示詞の使用方法は独言・内言と似て、両方ともに、聞き手の知識を考慮しないで、過去に脳に格納したことを言語化して、表出する。内言・独言におけるア系指示詞用法と回想におけるそれは密接に繋がっている。回想は内言・独り言の平行用法だと考えられる。

聞き手は話し手の発話内容とか、話し手の表情とかなどにより、回想かどうかが判断できる。その判断により、共有する知識の探査を停止する。

### 3.3.3 他の語用論的要因で聞き手の知識を想定しない場合

(11) 今日神田で火事があったよ。あの火事のことだから人が何人も死んだと思うよ。

黒田(1979: 101)(下線は筆者)

黒田は「その」は明らかに使えないが、「あの」を使った文は座りが悪いと言いながら、分析を行っている。ここでは、「概念的知識/直接的知識」という概念をより明確にする必要があるので、違和感のある例文だが、敢えて分析を行いたい。

黒田(1979: 101)は、話し手が「あの火事のことだから」という言外の意味、つまり、「神田の火事」という概念だけからでは知り得ない話し手の直接的知識に基づ

いて、話し手が「人が死んだだろう」と推定していると説明している。

本稿で解決したいのは、聞き手の共有知識も想定していない場合、なぜ「あの」が使えるかということである。本稿では、黒田の説明と違って、以下のような要因を考えている。

#### ① 「あの」の意味が「あんな」の意味へと拡張

上記(11)の例で、話し手は「今日神田で火事があったよ」という情報を聞き手(相手)に伝えた。普通の会話であれば、聞き手は必ず「ああ、あの火事ね」とか「ええ、どの火事？」などと反応する。話し手は聞き手からのなんの反応もない状態で会話を続けた。

例文(11)から見ると、直接的に話し手がこの火事を見ているのだと一般に理解できるであろう。また一方で、直接的に見ていなくても、「火事」について、間接的にかなり豊富な知識を持っていると判断できるであろう。

この例文に対して、田窪・金水(1996b)によると、「問題となる火事は話し手には知られているが、聞き手には知られていないのである」と指摘している。しかし、そう言われても、この話し手だけの発話からは、聞き手(相手)が火事に関して知っているかどうかは判断しにくいと思われる。話し手は文の最後で「よ」を使うことで、少なくとも聞き手は話し手よりその情報について多くは持っていないと想定していることを示している。

また、火事の程度差に焦点があり、「何人も死んだと思うよ」とは、誰にでもわかるほどの大きな火事だということは一般的に理解できよう。ここでの「あの」は単なる「あの」ではなく、「あんな大きな火事」というように理解されると考えられる。これは「あの」からの拡張した用法としても理解することができるだろうと考えられる。

#### ② ほかの語用論的制約

「…のことだから」とは、指示対象の属性を詳しく知らない、後ろの「人が何人も死んだと思うよ」という結論は導かれぬ。つまり、「…のことだから」は話者の直接的知識を要求する。よって、ここでは「あの」しか使えない。

では、なぜ聞き手の知識を想定していない場合も、ア系が使えるのか。

ここでは、ア系指示詞の使用には、共有知識よりも、

「のことだから」のような語用論的な制約が優先的に働くからだと考えられる。言い換えれば、「のことだから」が話し手の一方的な判断を述べていて、聞き手の存在をばかし、さらに、聞き手の知識を想定する必要がなくなったためである。この説明への証拠として、以下の例を見ていただきたい。

上の例文の「のことだから」を除外すると、以下の文になる。

(12) 今日神田で火事があったよ。その/あの火事で、人が何人も死んだと思うよ。

ここでは、「その/あの」を両方とも使えるのは、「のことだから」という語用論制約がなくなったからである。

以上の例文では、「その/あの」を使える理由として、以下の要因が考えられる。

すでに、3.2 で触れたように、指示詞の使用要因は聞き手への配慮と関係がある。以上の例を分析して見ると、話し手の聞き手に対する判断と配慮が「あの」と「その」の使用の差異となって表れていると考えられる。

話し手は聞き手の知識の有無と、情報量を知っている場合もあるし、判断できない、または知らない場合もある。聞き手の知識に関する認識を持っていない場合は、指示詞のどちらを使うかは話し手の判断によるものである。

上の例文では、もし話し手が聞き手にも火事に関して知識を持っていると判断し、ア系を使って、実際に聞き手も知っていたら問題はない。しかし、実際に聞き手が知らなかったら、聞き手に負担をかけることになる。なぜかという、話し手は自分が知っていると思っているのに聞き手は、期待に応じないと考える可能性もあるからである。

それを避けることがここではソ系を使う理由ではないかと思う。話し手が聞き手はあまりこの情報を得ていないと判断し、ソ系を使って、客観的に述べる。聞き手が実際に知らない場合には問題がなく、逆に知っていた場合には話し手の方が聞き手に対して横柄な態度で聞き手に接したことになる。どちらにしても話し手と聞き手の気持ちの配慮をどの程度話し手が考慮するかにあるように思う。

#### 4. おわりに

本稿では以下の議論を行った。ア系文脈指示詞が共有

知識を要求するとしても、ア系文脈指示詞の使用方法が、必ずしも一つの用法しかないとは限らない。そこで、聞き手の知識が必要な場合と聞き手の知識が不要な場合の二つに分けた。聞き手の知識が必要な場合、話し手、指示対象、聞き手の区別が基本となり、聞き手の知識が不要な場合、話し手と指示対象の区別となる。

本稿の論点は以下の図のようにまとめることができる。

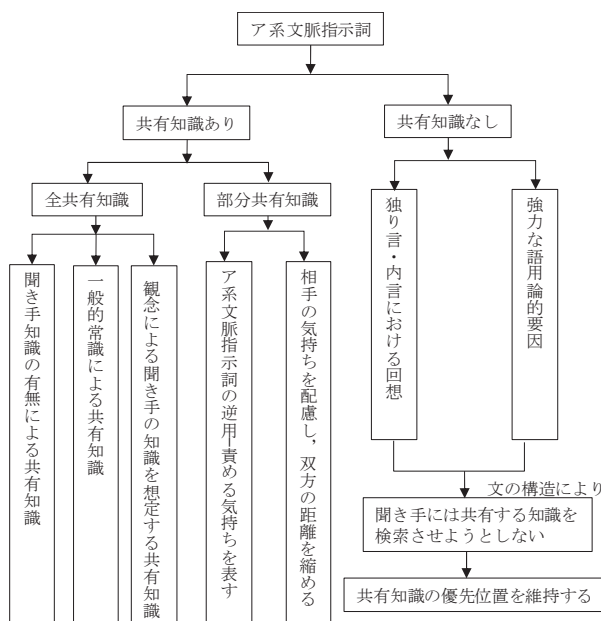


図3 聞き手の知識の要と不要における統一的な解釈

本稿では、以下の結論を導いた。

- ① ア系文脈指示使用規則は話し手の直接的な知識に基づき、共有知識を要求するのが基本である。
- ② 共有知識を持っていない、もしくは、聞き手の知識を想定しないとした場合に、ア系が使用された場合には、聞き手は、話し手と共有する知識を見出すことを止める。従って、双方の「共有知識」に焦点をあてたという優先性を保持する。
- ③ ア系文脈指示詞の基本的用法から、相手を責めるとか、相手との距離感を縮めて一体感を表すという機能が生み出された。それはコミュニケーションの継続保持の観点から、聞き手への配慮を促した結果である。

#### 引用文献：

黒田成幸、「(コ)・ソ・アについて」、『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』、ひつじ書房、1979。

田窪行則・金水敏,「複数の心的領域による談話管理」,『認知言語学の発展』,坂原茂(編),ひつじ書房,1996b.

東郷雄二,「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」,『京都大学総合人間学部紀要』7(京都大学総合人間学部),2000,(27-46).

## 注

- 1) 指示詞に関する分類はいろいろある。例えば,三上(1970)「直接指示・文脈承前」,久野(1973)「眼前指示・文脈指示」,黒田(1979)「独立的用法・照応的用法」,金水(1999)「直示・非直示」,田窪(2010)「眼前指示・非眼前指示」などが挙げられる。一般的に使われるのは「現場指示・文脈指示」であろう。これらの用語は言い方が違うが,それらの意味する範囲を一緒と認めれば,差し支えない。ア系現場以外の使用は,特別で「ア系記憶指示」と名付けられる場合もある。本稿ではあえて,「現場指示・文脈指示」という従来の分類に従って,分析を行う。
- 2) 本稿では,会話の順序において,発話する人は話し手,発話に応じて答える人は聞き手という決め方ではない。筆者が指示詞を使用する理由を究明したいので,指示詞を使う人を敢えて話し手と定義する。文の場合では,指示詞を使用して,発話する人は話し手と定義する。
- 3) (東郷 2000: 42)によると,「ここで「神の視点」と現実の人間の視点のちがいを理解するために,次のような思考実験を試みよう。旧知の間柄のAとBが交差点で出会うという状況を想定する。その交差点は高い塀で囲まれていて,道路を歩く人には別の方向から来る人は見えない。Aは交差点に北から,Bは東から近づく。ふたりは交差点でばったり出会い驚く。AとBの視点からは,この出会いはまったくの偶然に見える。しかし,この交差点を高いビルから見下ろしている人を想定しよう。この視点視点から見れば,AとBはともに交差点の方向に歩いているのだから,ふたりが出会うのは偶然ではなく,逆に必然である。この視点は神の視点である。現実の談話を構築する人間は,このような神の視点を取ることはできず,塀に囲まれた道を歩いている人の視点しか取りえない。

## 参考文献:

- 1) 佐久間鼎,「指示の場と指す語—『人称代名詞』と『コソアド』」,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,1951b,(32-34).
- 2) 三上章,「コソアド抄—『文法小論集』より一部」,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,(1970),(35-37).
- 3) 服部四郎,「コレ・ソレ・アレとthis,that—『英語基礎語彙研究』より」,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,1968.

- 4) 阪田雪子,「指示語『コ・ソ・ア』の機能について」,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,1971.
- 5) 久野暉,「コ・ソ・ア—『日本文法研究』より」,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,1973,(69-73).
- 6) 堀口和吉,「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8,(大阪外国語大学),1978b,(23-44).
- 7) 木村英樹・森山卓郎,「聞き手情報配慮と文末形式—日中両語を対照して—」,『日本語と中国語の対照研究論文集(下)』,くろしお出版,1992,(3-43).
- 8) 黒田成幸,「(コ)・ソ・アについて」,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,1979.
- 9) 正保勇,「コソア」の体系」,『日本語教育指導参考書8日本語の指示詞』,国立国語研究所,1989.
- 10) 金水敏・田窪行則・木村英樹,『日本語文法セルフ・マスターシリーズ4 指示詞』,くろしお出版,1989.
- 11) 吉本啓,「日本語の指示詞コソアの体系」,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,1992,(105-123).
- 12) 岡野一郎,「共有知識とコミュニケーションの行為」,『ソシオロゴス』17,1993,(44-55).
- 13) 田窪行則・金水敏,「対話と共有知識—談話管理理論の立場から—」,『言語』1月号,大修館,1996a,(30-39).
- 14) 田窪行則・金水敏,「複数の心的領域による談話管理」,『認知言語学の発展』,坂原茂(編),ひつじ書房,1996b.
- 15) 定延利之・熊谷吉治・荻田修司,「『用語解説』旧情報と新情報」,『文法と音声II』,音声文法研究会編,1999.
- 16) 東郷雄二,「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」,『京都大学総合人間学部紀要』7(京都大学総合人間学部),2000,(27-46).
- 17) 迫田久美子,「指示詞コソアの正用と誤用」,『月刊言語』33-11,大修館書店,2004,(130-131).
- 18) 福島祥行,「冠詞・指示・知識—相互知識のパラドクスと相互行為—」,『森本英夫先生古希記念『周辺』『TLLMF』合併号』,シメール社,2004,(61-74).
- 19) 建石始,「談話的機能の観点から見た後方照応」,『日本語教育124』,2005.
- 20) 前田昭彦,「ア系指示詞と聞き手の知識」長崎大学留学センター紀用,第13号,2005.
- 21) 庵功雄,『日本語におけるテキストの結束性の研究』,くろしお,2007.
- 22) 小川典子,「日本語指示詞の認知的研究—ソ系列指示詞における「聞き手」の位置づけ再考」,『言語科学論集』第14号,2008.